

人と組織の
新・論・点

CATALYST*

カタリスト

廣中邦充

悩みや不安を抱える子供の「駆け込み寺」西居院 住職

命懸けで守ることで 親は子供の後ろ盾となる

家出、不登校、ひきこもり……。様々な不安を抱え、心の居場所を持たず悩む子供が増えています。そんな子を救いたいと、1994年から僕のお寺に全国から子供を迎え入れ、これまで500人以上と共に生活し、社会へ送り出しました。

きっかけは息子の高校のPTA会長になったときに、不登校や退学してしまう子があまりに多いと知ったこと。実は私自身も学生時代かなりの問題児だったから、子供たちの気持ちが手に取るようにわかりました。私が荒れた理由は、貧乏寺が嫌だったことと厳格な父親への反抗心。高校生の頃に傷害罪で逮捕されかけたこともあるんですよ。でもその時、手を焼いていたはずの担任教師が、警察署で泣きながら土下座をして説得してくれた。「廣中の面倒を見て必ず更生させるから」って。約束通り、教師宅で一カ月生活し、とことん面倒を見て頂きました。この心の支えがあったから、今の僕がいるのです。

子供たちは、この心の支えという「後ろ盾」を得ることで、自信

や勇気を持つ。「おじさんが必ず守る。一緒に卒業しよう」と言葉を掛けると、不登校で悩んでいた子供たちがお寺に来て二日目には学校に通い始めるのです。

叱ることと怒ることの違い

そんな「守る」ことの一つに、「叱る」という行為もあります。わざと茶碗や灰皿を床に投げつけて「これを元に戻せ！」と怒鳴る。壊れて初めて、失ったものは簡単に修復できないとわかる子供も多いので、経験させ理解させるのです。3分後には握手をして仲直りをする。叱るのは一度きりで、過去の悪さを蒸し返してはいけません。それは叱るではなく、怒ることだからです。怒りはただ感情を噴出しているだけなので、収まらないと尾を引き、繰り返し怒鳴ってしまう。聞いている子供は不信感を募らせるだけです。叱るというのは、子供を何とかしてあげたいという親の愛情の表れなのです。本気になって向き合い、命懸

けで守ることで、親は後ろ盾になれるし、子供は安心して学校や社会へ飛び込めるのです。

心と体を成長させる 家族のような寺の生活

「後ろ盾」は家族や親だけではありません。学校や職場、目標など様々な事柄も、子供たちの後ろ盾になります。お寺で過ごす中学二年生の女子生徒は、学年一番の成績で生徒会副会長にもなりました。医者を目指して昼間は仕事、夜は予備校に通う子もいます。子供たちが親以外の「後ろ盾」と出会い、成長しているのは、寺の大家族のような生活が、互いに刺激となっているからです。必ず全員で夕食を食べ、その後は個人の部屋にこもらず、みんなで宿題、キャッチボール、おしゃべりと、日常の中で皆が触発しあい支えとなり、居場所を見つけている。そんな「後ろ盾」と出会える機会を子供たちに与えることも、親や私たち周囲の大人の、大切な役目だと思います。

文/牛久珠理(編集部)

PROFILE ひろなか・くにみつ

1950年、愛知県岡崎市生まれ。大正大学仏教学部を卒業後、家電販売会社勤務。塾や会社経営を経て90年より父の跡を継ぎ、浄土宗西居院第21代目住職となる。94年より不登校児や非行に走る子供たちの相談、預かりを無償で行っている。愛知県暴力追放推進員、岡崎市少年補導員理事も務める。

